ボコボコのドロップ缶

　父さん、貴女のひ孫は今、ドロップ缶の音に戯れています。遠い昔の父さんの事想い出します。私が小学校入学を控えた三月、赤紙一枚での父さんとの別れでした。入隊前夜の二人での散歩の途次、買ってくれたドロップの缶。明るい色彩と振った時の缶の音に少しの喜びを感じ、思わずスキップを踏んでいた私に父さんも合わせてくれましたね。戦地への輸送船に乗る前の逢瀬に、食べ残しのドロップの缶を「これあげる、きれいな缶だから、で良いから持って帰ってね。」の私の一言が、傍に居た母さんの涙を呼んでました。四年して帰還した父さんは、ボコボコで弾の跡もついたドロップ缶と、金文字と菊の御紋のついた黒塗りの勲章箱を「」の一言に添えたのでした。母さんは神棚に涙でその二つを置きましたね。五十年、想い出はかすんできたけれど、あの時の色彩と光景だけは今も心に残っています。

（大阪府74歳）大西陽子